

古代の大津

1 大津京遷都の時代背景

660年、日本と友好関係にあった百済が唐・新羅により滅ぼされ、その復興を目指して朝鮮半島に出兵した日本・百済の連合軍は663年に白村江で大敗北を喫しました。その結果、唐・新羅により攻撃を受けることが懸念されるようになり、琵琶湖の湖上交通を通じて東国との連携を図るなど、国防上の防衛強化が急務となりました。

また、国内的には「倭国」から「日本国」へと国家の体制を大きく変革しつつある時期であり、未だ反対勢力も多く、国内政界は緊迫していました。このため、首都移転により政界の再編成を図り、新政権の体制を強化する古代政治の改革が求められました。

このような国内外の情勢に対応するため、667年（天智6年）天智天皇は近江大津宮に遷都し、我が国最古の戸籍である庚午年籍を整備するなど、律令体制の基礎づくりが行われました。まさに近江大津宮は、日本国成立期の枢要な「都」として位置づけられます。

近江大津宮に関連する歴史文化資産としては、近江大津宮錦織遺跡、崇福寺跡、穴太廃寺跡、南滋賀町廃寺跡、園城寺（三井寺）などが残されています。

大津京遷都以前においても、『日本書紀』によれば、大和朝廷成立期の4世紀頃、景行・成務・仲哀の三天皇が高穴穗宮（現在の高穴穗神社と伝えられている）を宮居としたと伝えられています。また、百穴古墳などは渡来人のものらしく、大友村主、穴太村主などの勢力が存在したと伝えられ、早くから大陸の新しい文化を受容していた地域でもあり、このことが大津京遷都に影響したとする説もあります。

2 史跡としての大津京

大津宮は、『日本書紀』『懐風藻』『藤氏家伝』などの史料から、内裏・浜台・大蔵・宮門・朝廷・大殿・漏刻・内裏仏殿などの施設があったことがわかっていますが、その所在地は長い間不明でした。所在地をめぐって、大津市市街・錦織・南滋賀・滋賀里・穴太などの説があり、論争が続いていました。1974年（昭和49年）錦織地区の一面で大津宮の中心施設と思われる遺構が発見されました。

以後、周辺地域における数次の発掘調査を経て、内裏正殿・南門・回廊・塀などの遺構が確認され、大津宮の姿が次第に明らかとなってきました。そして、1979年（昭和54年）に「近江大津宮錦織遺跡」として国の史跡指定を受けることとなりました。

また、同時代の寺院跡として、滋賀里西方山中の崇福寺跡、南滋賀集落内の南滋賀町廃寺跡、園城寺の前身となる寺院跡、穴太の穴太廃寺の4寺院が発見されています。

3 近江国府

壬申の乱により近江大津宮が廃された後も、大津は都に隣接し、都と東国・北国とを結ぶ水陸交通の要衝という地理的条件から、常に歴史上の重要な地域であり続けました。

このため、近江国は、藤原仲麻呂をはじめとする律令政府の最高位ないしは、それに準じた地位にあった貴族が、近江守に就任しているという特異な国でした。

8世紀中頃には、近江国府が設置され、平安時代初期にかけて、中央から国司が派遣されました。

現在、近江国庁跡、惣山遺跡、青江遺跡、堂ノ上遺跡などの史跡が残されています。

●「仏都」大津

近江大津宮が廃された後、大津は古津（旧首都の港）の名に甘んじてきましたが、794年の平安京遷都に伴いその外港、「大津」として復活しました。

さらに大津と平安京との結びつきを深めたのは仏教でした。8世紀中頃の保良宮の建設に伴う石山寺の整備、8世紀末頃の最澄による延暦寺の開基、その弟子円珍による園城寺の再興などによって、大津は都の人々の信仰を集め、さながら「仏都」の観を呈しました。

また、平安時代には、当時著名であった石山寺、園城寺などが、西国三十三所観音巡礼の札所に組み込まれ、社寺参詣の旅人たちにより一層の賑わいをみせました。

●中世の大津

●交通の要衝地としての発展

中世になると、近江国内の水陸の交通路は、東国・北国庄園から京都への年貢上納ルートとして、一層の繁栄をみました。この交通の発達を背景に、例えば、延暦寺支配下の堅田・坂本関のように、交通の要衝地には関銭収入を目的とした関所が多数設けられました。

●近世の大津

●都市の発展

琵琶湖の最狭部に当たる堅田は、往来する船を掌握して湖上交通を支配しました。一方、坂本・大津は物資中継港として栄え、京への陸運を担う馬借の根拠地ともなりました。

近世には、織田信長が敵対する延暦寺を焼き討ち（1571年）し、膝下の下阪本の湖岸に坂本城を築きました。当時の下阪本は京への近道とされた山中越や湖西の北国海道及び琵琶湖航路を抑える格好の地でした。

その後、政権が豊臣秀吉に握られるや、京・大坂・伏見と東国・北国とを結ぶ交通の拠点として大津が重視され、1586年頃に大津城が築かれました。

徳川家康政権も秀吉の政策を引き継ぎ、1602年、大津を東海道の宿場に指定、幕府の直轄都市として大津代官を置き、大津の掌握に力を入れました。大津はこれ以降、宿場町・港町として賑わいをみせました。

また、湖南の膳所崎には膳所城が築かれ、城下町が整備され、北部の堅田では堅田藩が独自の民政を行っていました。

●近江八景

室町の頃に、中国湖南省の洞庭湖付近の「瀟湘八景」を手本に八景選びが盛んに行われました。「近江八景」は室町後期、応仁の乱を避けて近江に来住した禅僧が琵琶湖の景勝を見出したことに始まると考えられています。

15世紀の成立が伝えられる曲舞の「近江八景」には、小松原晴嵐、真野入江暮雪、堅田帰帆、堅田夜雨、比叡山晩鐘、唐崎落雁、鏡山秋月、白鬚夕照と記されるなど、現在の八景定着までには幾度となく考案が繰り返され、現在の「近江八景」は江戸時代初頭の文化人たちが選定したことで確立したと考えられます。

「近江八景」のうちの七景までが大津に属しており、大津周辺が近江を代表する美しい風景を有する場所であったことがうかがわれます。